

二葉亭四迷の用いた漢字表記の副詞
—『浮雲』の用例から—

Adverbs in Kanji notation used by Futabatei Shimei
From the example of “Ukigumo”

山口 豊

YAMAGUCHI, Yutaka

要旨

言文一致文体小説の嚆矢とされる『浮雲』には多くの副詞が用いられており、漢字表記されたものも多く存在する。本稿は漢字表記された副詞のうち、「～然と」という表記で和語読みされた 16 語を取り上げ、その表記を採択した理由について考察したものである。その結果、二葉亭四迷は和語としての読みと漢語としての意味を読者の視覚的理解を利用して「読み物」として示すなどして新しい口語文体での小説を工夫しようとしていることが明らかになった。

キーワード 二葉亭四迷 浮雲 副詞 然

はじめに

日本の本格的な近代文学の始まりは、明治 21 年に二葉亭四迷によって書かれた『浮雲』に始まると言っても過言ではない。その『浮雲』の一部を引用してみよう。以下、本文の引用は『二葉亭四迷全集』による^①。

- ・良暫らくの間といふものは身動もせず息気をも吐かず死人の如くに成つてゐたが倏忽勃然と跳起きて

「もしや本田に……

ト言ひ懸けて敢て言ひ詰めず宛然何敷搜索でもするやうに愕然として四方を環視した

それにしても此疑念は何處から生じたもので有らう 天より降ツたか地より沸いたか抑もまた文三の僻みから出た蜃楼海市か 忽然として生じて思はずして来り恍々惚々として其来所を知るに由しなしといへど何にもせよ彼程までに足掻きつ腕きつして穿鑿しても解らなかつた所謂冷淡中の一物を今譯もなく造作もなくツイチョット突留めたらしい心持がして文三覚えぬ身の毛が弥立ツた (第八回 p.82)

近代日本文学として言文一致文体で書かれたこの作品は内海文三という主人公の心理描写を實に見事に書き記し、名前からして内向的な主人公が自分の恋心を打ち明けることができずに悶々とする様子が、これまでになかった新鮮なものとして明治の読者に印象付けられたことは有名である。

この描写に一役買っているのが「副詞」である。副詞は動作や状態を表す語についてさらに細かな状態や程度や呼応などを表し、イメージを補助するものである。ここに引用した部分にも「良(やや)」「宛然(さながら)」「チョット」などの副詞が用いられている。

ただし、これらの副詞は今では珍しく漢字表記されたものが多い。これは『浮雲』に限らず、この時代の作品にはこうした漢字表記された副詞が多く用いられており、『浮雲』も例外ではない。

- ・ちと 「些と急ぐから…… (第九回 p.93)

* 教育学科教授

- ・ やっきと 熱気として自ら叱責ツて (第八回 p.84)
- ・ ぶるぶると 文三は慄然と身震をして起揚り (第四回 p.30)

さらに注意深く漢字表記された副詞をみると、「～然(と)」という語形を持つグループの存在があることに気付く。

これらは「形容動詞」タリ活用の連用形として解釈することができる。「毅然とした態度」「釈然としない」などの語はいうまでもなく、もとは形容動詞である。ただし、こうした形容動詞として認定されるのはその語が「音読み」である場合に限られる。たとえば「悄然と」という語を「しょうぜん」と読めば形容動詞の連用形であるとも考えられるが、「しょんぼりと」と読むのであればそれは副詞として認定されるべきである。なお、口語文法においては形容動詞の活用は一種類であり、いわゆる「タリ活用」は存在しない。また、「～と」という語形のみしか用いられないので、形容動詞とは認めないという考え方もある。

先行研究としては中里理子「明治前期の和語系・漢語系オノマトペについて —『浮雲』を中心に—」という論文がある²⁾。中里氏はこの論文の中で、和語系オノマトペで表現し得ない部分を漢語系オノマトペで補ったこと、漢語系オノマトペの中でもすでに広く用いられているものを中心に言文一致文にとりいれようとしたのではないかと述べている。

また半澤幹一「二葉亭四迷の漢字 —『浮雲』における字法—」において「然」の読み方について音訓どちらで用いている語が多いかを調査したものが³⁾ある。

本稿は先行研究を踏まえて『浮雲』に用いられている「～然と」という語形を持つ副詞を中心に、和語としての「よみ」をもつ漢字表記の語について、なぜその漢字を用いたのかを明らかにしようとするものである。

そこでまずは『浮雲』第一編から第三編の自立語(約 31,000 語)の Excel データを作成し⁴⁾、それを用いて「～と」という形を持つ副詞を抜き出し、次にその中から「～然と」という形の副詞を取り出し、それを音訓の表記に分け、漢字表記でありながら訓の読みを持つ語を抽出することとした。

副詞の定義

副詞は、自立語で、活用がなく、連用修飾語になることのできる品詞であり、次のような特色を持つ語である。①他の文節を修飾し、意味や様子を詳しく述べる。②副詞は単独で一つの文節を作ることができるので、自立語である。③主語になることができない。主に用言を修飾する連用修飾語となる。

また、副詞は機能から次の 3 つに分類されているのが一般的である。①状態副詞 動作や作用の様子を表す。擬音語・擬態語と呼ばれるものも状態副詞に分類される。②程度副詞 物の性質や状態などの程度を表す。これはさらに a 用言を修飾する、b 体言を修飾する、c 副詞を修飾する、という 3 つに分類できる。③陳述副詞・・・話し手の気持ちや判断、述べ方を表す。

ここでは用言を修飾する「～然と」という状態副詞を中心に考察していくこととする。

『浮雲』について

明治 21 年に発表された『浮雲』の著者である二葉亭四迷は、本名を長谷川辰之助と言い、坪内逍遙の『小説神髓』の内容を具現化して書いた小説である。

全十九話からなり、第一部(第一話～第六話)、第二部(第七話～第十二話)、第三部(第十三話～第十九話)の三部構成となっている。無名の新人の出版ということで、第一部と第二部は坪内逍遙の名義を借りて「坪内雄蔵」の名で出している。

内容は静岡の士族の血筋を引く内海文三が東京で官僚となって働いていたが、ある日課長の不評を買い免職となる。文三は下宿先にいる遠縁に当たるお勢と言う娘に恋心を抱くが、内向的な性格ゆえ、なかなか言い出せない。そのうち文三の同僚の昇がお勢に近づき、文三の心はますます乱れていく。結局、昇はお勢から離れ、文三はまたもやもやした思いに駆られて行くというものである。

この作品は言文一致文体で描かれており、日本近代文学史上における貴重な存在となっている。同時期に二葉亭四迷によって書かれた『あひびき』とともに後進の作家たちに多大な影響を与えたことでも知られている。

文調については、坪内逍遙から三遊亭圓朝の落語を手本にして書いてみてはどうかというアドバイスを受け、自分自身、これでいいのかと疑問を抱きながらも書き上げたものであると回顧している。

この作品において二葉亭四迷は「内面的心理描写」というものを克明にかつ丁寧に書いており、そのことも高い評価を得ている。

揺れ動く微妙な心の差異を表現するためにも副詞は有効であり、この作品の中にも多くの副詞が用いられている。

「～然と」の使用実態

『浮雲』に用いられている「～と」の語形を持つ副詞の数は次の（ ）に示した通りである。

第一回（「スラリと」等 22 例）、第二回（「うかうかと」等 17 例）、第三回（「どやぐやと」等 36 例）、第四回（「ザワザワと」等 32 例）、第五回（「ムクムクと」等 27 例）、第六回（「ガラリト」等 18 例）、第七回（「ゴソゴソと」等 49 例）、第八回（「ブルブルと」等 28 例）、第九回（「さっさと」等 35 例）、第十回（「ニヤリと」等 39 例）、第十一回（「シックリと」等 15 例）、第十二回（「スックと」等 20 例）、第十三回（「憤然と」等 6 例）、第十四回（「すらりと」等 14 例）、第十五回（「はらはらと」等 21 例）、第十六回（「悄然と」等 3 例）、第十七回（「くすくすと」等 20 例）、第十八回（「喋々と」等 14 例）、第十九回（「さらりと」等 27 例）

このうち、「～然と」という語を各回ごとにすべて抜き出してみると次のようになった。丸数字は各回における頻度である。

第一回 駭然と①・儼然と①・悄然と①・秩然と①
 第二回 悄然と①・茫然と①
 第三回 喟然と①・駭然と①・慄然と①・莞然と①・莞然と①・蕭然と①・慄然と②・蹶然と①
 第四回 慄然と①・蹶然と①・轟然と①
 第五回 悄然と①・茫然と①・憤然と①・憤然と①
 第六回 徒然と①・憤然と①
 第七回 憤然と①・怫然と①・蹶然と①・紛然雜然と①・轟然と②・愕然と②・莞然と①・茫然と①・自然と①・翼然と①・默然と②
 第八回 徒然と①・勃然と①・愕然と②・轟然と①・默然と③・默然と①・忽然と①・
 第九回 愕然と①・傲然と①・慄然と②・憤然と②・木然と①・憤然と②・索然と①
 第十回 愕然と①・肅然と①・默然と②・默然と①
 第十一回 猛然と①・默然と①
 第十二回 儼然と②・慄然と①・默然と①
 第十三回 憤然と①
 第十四回 なし

第十五回 なし

第十六回 悄然と①・決然と①・悵然と①

第十七回 徒然と①

第十八回 愕然と①・豁然と①・忽然と①

第十九回 惘然と①・茫然と①・勃然と①・判然と①

このうち漢字と読みとが一致しない、つまり音読みではない副詞として用いられているのは、「儼然と」「悄然と」「莞然と」「莞然と」「駭然と」「慄然と」「慄然と」「蕭然と」「肅然と」「蹶然と」「勃然と」「憤然と」「徒然と」「怫然と」「豁然と」「自然と」という 16 語ということになる。

そこでそれぞれの語の意味と漢字本来の語義とはどのような関連があるのかを見ていくことにする。副詞としての語釈は岩波書店の「広辞苑第七版」、熟語としての語釈及び漢字本来の語義は大修館書店の「大漢和辞典」によることとした。

「儼然と」

本文の用例：秀た眉に儼然とした眼付でズーと押徹つた鼻筋 唯惜哉口元が些と尋常でないばかり、
(第一回 p.8)

広辞苑の語釈 ① 時間的に極めて短いさま。急に。すばやく。とっさに。はっと。②相手のつけいる隙がなく、厳しいさま。状態や表情にゆるみのないさま。嚴重に。きっぱりと。きりっと。③確実に
行われることを予測・期待するさま。たしかに。必ず。相違なく。

大漢和の語釈（儼然：げんぜん）威厳あるさま。おごそかにけだかいさま。

「儼」の語義 頭をあげおこす。おごそかなさま。いかめしい。つつしむ。うやうやしい。よいさま。

「儼然と」は第一回と第十二回で用いられている。今では厳しい表情で相手をにらむときの様子を
表した言葉として使われることが多いが、ここに挙げた用例は「きりっとした」という意味で用いら
れている。そのきりっと引き締まった様子を表すのに「厳かで気高い」という意味を持つ「儼然」と
いう表記を当てたものと考えられる。

また次のような表記も見られる。

・するとお勢は倍と振向いて、可畏らしい眼付をして文三を睨め出した。(第十五回 p.147)

・苦々し想に冷笑ひ乍ら顔を背けたが忽ちまたキツとお勢の方を振向いて (第十二回 p.130)

「悄然と」

本文の用例：終にハ虫の這ふ様になり悄然と頭をうな垂れて二三町程も参つた頃不圖立止りて四邊を
回顧はし (第一回 p.9)

広辞苑の語釈 気落ちして沈んでいるさま。悄然。

大漢和の語釈（悄然：セウゼン）憂い悲しむさま。物寂しいさま。勇気が挫けて意気のあがらぬさ
ま。悄悄に同じ

「悄」の語義 うれへる。うれひにしづむ。しづか。きびしい。はげしい。

広辞苑の語釈にもあるように「悄然」という語が意気の上がない様子を表す言葉であるので用い
られている。第五回には音読みで「悄然と」が用いられており、四迷の中では同じ意味であったこと
が伺える。

・今も今母親の写真を見て文三は日頃喰付けの感情を起し覚えぬも悄然と萎れ返つたが (第五回
p.47)

「莞然と」

本文の用例：何故ともなく**莞然**と笑ひ仰向いて月に観惚れる風をする（第三回 p.25）

広辞苑の語釈 嬉しそうな素直な笑みを浮かべるさま。

大漢和の語釈 （莞然：クワンゼン）微笑するさま。莞爾。

「莞」の語義 む。まるがま。蒲の一種。むしろを作るに用ひる。むしろ。みで織ったむしろ。姓。地名。笑ふ。にっこり笑ふ。笑ふさま。

『浮雲』の中では「莞然」と「莞爾」の両方に「にっこり」という読みが用いられている。「莞」という字の語義が「にっこり笑ふ」のであるから当然である。音読みしている例はなく、「にっこり」にはほとんどの例に「莞」の字が用いられている。例外としては第五回に「文三の顔を見て是もまたニツコリして（p.48）」とカタカナ表記された例がある。

また、「にっこり」という読みは同じだが、「嫣然」という表記も見られる。こちらは「あでやかに」という状態が加わるところが「莞」とは違う。女性の美しい艶やかな微笑みということで、この用例でもお勢という女性の仕草を表すのに用いられている。つまり同じ「にっこり」という動作でも女性の場合のみ「嫣然」という表記を用いている。

- ・今突然可愛らしい眼と眼を看合はわせしほらしい口元で**嫣然**笑はれて見ると……（第五回 p.47）
「にっこりと」ではなく、「にっここと」という読みをした箇所もある。
- ・螺の壺々口に**莞然**と含んだ微笑を細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持てゐた団扇で隠蔽して（第三回 p.25）

「駭然と」

本文の用例：等しく文三は**駭然**としてお勢の顔を目守る（第三回 p.22）

広辞苑の語釈 不意のことに驚きや恐怖を感じたり緊張したりするさま。

大漢和の語釈 （駭然：ガイゼン）おどろくさま。

「駭」の語義 おどろく。おどろかす。みだれる。みだれ。うごく。うごき。ちる。ちらす。いましめる。たつ。たち上る。四蹄皆白い豚。

驚き方にもいろいろあり、分類語彙表⁶⁾では2.3002の感動・興奮の02項には「驚く、びっくりする、ぎょっとする、はっとする」など驚き方の分類が示されている。その中で「駭」は訓として「おどろかす」があるので「おどろかされる」と受身にとれば「ぎょっとする」に通じるものがある。そこでこの漢字を用いたことが想像される。

第十五回では次のような表記も見られるので二葉亭四迷の中でも揺れていたことが伺える。

- ・つと起き上ツたお勢の体が……不意を打たれて、ぎよツとする（第十五回 p.146）

「慄然と」

本文の用例：瓜実顔にほつれ掛ツたいたづら髪二筋三筋扇頭の微風に戦いで頬の邊を往来する所は**慄然**とするほど凄味が有る（第三回 p.25）

広辞苑の語釈 ① 寒気・畏怖・恐怖などで瞬間的に心身が縮むような冷気を感じるさま②身体が震えるほど感動するさま。

大漢和の語釈 （慄然：リツゼン）おそれるさま。をののくさま。

「慄」の語義 おそれる。をののく。ふるへる。すくむ。ぞつとする。うれへる。かなしむ。いたむ。

分類語彙表の3.3001感覚の項に「ぞつと、ぞくぞく、ぞくつと、ひやりと、ひやひや」というグループ(04)がある。「慄」の語義にも「ぞつとする」とあり、漢字表記するとすれば「慄然」がふさわしいこ

とがわかる。ただし、「慄然と」で「ぞっと」という読みがあるのは第三回の一例だけである。

第十五回では似たような様子を表すのに「ひやりと」という語が用いられている。

・文三はひやりとして、思はず一生懸命にお勢の顔を凝視めた（第十五回 p.146）

「慄然と」

本文の用例：ザワザワと庭の樹立を揉む夜風の余りに顔を吹かれて文三は**慄然と**身震をして起揚り（第四回 p.30）

広辞苑の語釈 （ぶるぶる）①モーターなどが小刻みに振動する音。②寒さ・恐怖・緊張・怒り・中毒などで体が生理的に震えるさま。③小刻みに動かしたり揺れたりするさま。

同じ表記で「慄然と」があることは左記に述べたとおりである。「ぞっと」は意識、感覚と心の動きを中心としたものであるのに対し、「**慄然と**」は動作、動きに着目した表現である。分類語彙表では3.1511に分類されている。「慄」には「ふるえる」という意味もあるので不思議ではないが、「震然」でもよさそうなものだがあえて「慄」の字を用いたのは心の動きを伴う動作であることをこの「慄」なら暗に示すことができたからではないかと考えている。第三回、第四回、第九回、第十二回と、第一編、第二編、第三編ともに用いており、四迷が好んだ表現であった可能性もある。

また、単に震える動作だけのときは四迷はカタカナで表記している。

・ブルブルと頭を左右へ打振る（第四回 p.32）

「蕭然と」

本文の用例：須臾にして風が吹罷ればまた四邊**蕭然と**なつて軒の下艸に集く虫の音のみ独り高く聞える（第三回 p.24）

広辞苑の語釈 （ひっそり）①静かで物音や人の気配が全く感じられないさま。②ひそやかに目立たないさま。

大漢和の語釈 （蕭然：シユクゼン）つつしむさま。おそれるさま。また、おそれつつしむさま。しづかなさま。おごそかでしづかなさま。治安のゆきとどいているさま。ぞっとして身のひき締るような感じを與えるさま。

「蕭」の語義 つつしむ。又うやまう。うやうやしい。おごそか。威厳あること。いましめる。ただす。ととのう。ととのえる。きびしい。しづか。きよい。さむい。ちぢむ。寒さのために萬物が縮む。ころす。そこなふ。きびしくなる。すみやか。すすむ。徐行してすすむ。とくすすむ。進むことがはやい。みちびく。物のこゑ。

「蕭」が静かという意味を持ち、「蕭然」も「静かなさま」という意味であるので、物音のしないひっそりとした静けさを表すのにこの表記を当てるのはよくわかる。

「肅然と」

本文の用例：暫らくすると梯子段の下で洋燈を如何とか斯うとか云うお鍋の声が出たがそれから後は**肅然と**して音沙汰をしなくなつた（第十回 p.105）

「肅」は「蕭」の俗字であるので、同じ読みをしていて当然である。

「蹶然と」

本文の用例：如何いふ心計か**蹶然と**起上がりキヨロキヨロと四邊を環視して火入に眼を注けたが（第七回 p.67）

広辞苑の語釈 急に起き上がったり立ち上がったりするさま。むくと。

大漢和の語釈 （蹶然：ケツゼン）驚いてとび立つさま。奮い立つさま。

「蹶」の語義 たふれる。つまずく。くつがへる。かたむく。つきる。やぶれる。かっけ。ぬく。

をどる。はしる。たつ。起きかえる。おどろく。すみやか。ふむ。たふす。ころす。くじく。へだてる。獣の名。をかす。うごく。うごかす。あはてて行くさま。よい。わるがしこい。みじかい。

第四回, 第七回に「蹶然と」の用例があるが, 第九回には音読みの用例がある。「蹶」には「あわてていくさま, 立つ」という意味があり, そこを取り上げて「急に立ち上がる」という意味の「むつくと」にあてたのだろう。ここにも四迷の苦心が見える。また, 第九回には音読みの「蹶然」がある。

・黙礼するや否や文三が蹶然起上ツて坐舗を出て二三歩すると後の方でドツと口を揃へて高笑ひをする声がした (第九回 p.95)

「勃然と」

本文の用例：良暫らくの間といふものは身動もせず息気をも吐かず死人の如くに成つてゐたが倏忽勃然と跳起きて、「もしや本田に…… ト言ひ懸けて (第八回 p.82)

広辞苑の語釈 急に起き上がったり立ち上がったりするさま。むくと。

大漢和の語釈 (勃然：ボツゼン) 顔色をかへるさま。むつとするさま。にはかなさま。卒然。にはかにおこるさま。盛んに興起するさま。

「勃」の語義 おこる。さかん。つとめる。おしひらく。のべる。にはか。うらむ。あらそふ。もとる。おほきい。顔色をかへるさま。海の名。

読みとして「蹶然」と同じであるが、「蹶然」が 4 例であるのに対し「勃然」は 3 例あり, こちらの表記の方が少ない。「勃」には「にわか, おこる」という意味があり, 急に立ち上がるということでは「蹶然」よりはっきりと意味が取れる。いずれも借字である。

なお, 第二回には「勃然」に「むつくり」という読みを当てている場面がある。

・まづ朝勃然起る, 弁当を背負はせて学校へ出て遣る, (第二回 p.13)

「憤然と」

本文の用例：「ア、モウ解ツた解ツた何も宣ふナ よろしいヨ, 解ツたヨ ト昇は憤然と成ツて饒舌り懸けたお勢の火の手を手頭で煽り消して (第六回 p.58)

広辞苑の語釈 (名 躍起) せきこんでいらだつこと。むきになって熱心に物事をする事。

大漢和の語釈 (憤然：フンゼン) いきどほるさま。

「憤」の語義 いきどほる。もだえる。いかる。たかぶる。ふるひおこる。はげむ。うらむ。なげく。いきどほり。もだえ。くるしみ。なげき。いかり。うらみ。あだ。くるしむ。なやむ。みちる。つむ。さかん。おこる。みだれる。

第五回, 第六回, 第九回に用いられている。むきになっている様子が憤る様子に似ていることからの流用であると思われる。第九回, 第十三回には音読みの「憤然(ふんぜん)と」も使用されており四迷自身の中では使い分けがなされていたことがうかがえる。

ただし、「むきになる」様子を示す言葉としては「熱氣と」という表記も用いられている。

・くすぐりに懸ツた其の手頭を拂らひ除けて文三が熱氣となり (第三回 p.27)

「徒然と」

本文の用例：「欠びをして徒然としてゐることは無やアね。本でも出して来てお復習なさい。」(第十七回 p.154)

広辞苑の語釈 何事もせずにぼんやりしているさま。ひとりさびしそうにしているさま。

大漢和の語釈 (徒然：トゼン) いたづらに。漫然。理由のないこと。ただにしかり。そればかり。

むなし。うそ。つれづれ。無聊。

「徒」の語義 かち。かちかちあるき。歩兵。歩卒。人夫。めしうど。しもべ。従者。門人。とも。

くみ。なかま。黨與。人々。衆人。から。何もないさま。からて。すで。はだし。はだぬぎ。いたづらに。むなしい。むなしく。むだ。ただ。ひとり。ともなふものがない。苦役に服せしめる刑。ひとり。かたはら。こと。のり。姓。いたづら。

「徒」に「つく」という読みはないが、ひとりでむなしく何もない様子から「徒」の字を当てることは想像に難くない。

「佛然と」

本文の用例：文三も佛然とはしたが其処は内気だけに何とも言はなかった（第七回 p.66）

広辞苑の語釈 ①強い臭気や熱気で息が詰まりそうに感ずるさま。②込み上げる怒りを不機嫌そうに抑え込んでいるさま。

大漢和の語釈（佛然：フツゼン） 心中に怒るさま。むつとするさま。むつくりとふくれるさま。

「佛」の語義 いかるさま。おちつかないさま。むすぼれる。こもる。いかる。もとる。

「むつと」は広辞苑の語釈のように不快な感情を表すときに用いられるが、「佛」の語義に「いかる」とあり、「佛然」でふくれるさまを表すところからこの表記が用いられている。ただし、この一例だけであり、他の5例はカタカナ表記となっている。

・お勢はお勢で可笑しく下唇を突出してムツと口を結んで額で鼻を疾視付けた（第九回 p.93）

「豁然と」

本文の用例：艶なうちにも、何処か豁然と晴やかに快さそうな所も有りて、（第十八回 p.165）

広辞苑の語釈 ①硬いものが転がって発する軽い音。②ある状態が急にまたはすっかり変わるさま。③明るく広々としたさま。④湿気や水分が少なく、心地よく乾いているさま。⑤性格が明るくさっぱりしているさま。

大漢和の語釈（豁然：クワツゼン） からりと開くさま。開いて大きいさま。ひろびろとしたさま。疑い又は迷がさらりと解け開くさま。さとるさま。

「豁」の語義 ひろくとほつた谷。ひらける。とほる。とどく。むなしい。うつろ。おほきい。度量が大きい。ふかいさま。ゆるす。

大漢和の語釈に「からりと開くさま」とあるように、「からりと」という表現が込められている。「からりと」はこの時代「憂然」「廓然」「空洞」「翻然」「翻然」などの表記で書き表されることもあったが、眼前が開けるさまを表すのに「豁」の字をあえて用いたと考えられる。

このように和語の読みを持つ副詞に漢字の表記を与えるにあたり、四迷は意味の近い漢語を用い、ふり仮名を付けることで読みと意味の両方を読者に情報として与えようとしていたことがわかる。つまりは視覚的理解をも取り入れようとしたのである。

「自然と」

本文の用例：黙ツてゐても自然と可笑しいからそれで笑ふやうで（第七回 p.69）

広辞苑の語釈 自然に。ひとりでに。おのづから。

大漢和の語釈（自然：シゼン） 人為の加はらない義。天然。本来のまま。おのづから。

「自」の語義 み。みづから。おのづと。おのづから。よりする。よる。よりは。よつて。もちひる。もつて。いやしくも。かりそめにも。でどころ。出所。はな。もと。はじめ。みちる。いきどほる。憤懣。たしなむ。

「自」には「おのづから」という意味があるので、「自然と」に「おのづと」という読みを与えても不思議ではない。

ちなみに『浮雲』には「おのづから」はこの1例のみであり、「みづから」は4例あった。

「よみ」の自由度

2022年5月に法制審議会の戸籍法部会は「氏名の読みがな」について中間試案をまとめ公表した。いわゆる「キラキラネーム」をどこまで認めるかというものである。「大空」と書いて「すかい」と読むことや「光宙」と書いて「ぴかちゅう」と読むことを認めていこうとする案である。

これは漢字の読みをどうするかという問題に直結している。漢字の読みや振り仮名は音訓慣用のみとするもっとも狭い範囲とするかどうかという問題は今に始まったことではない。たとえば明治7年に刊行された「郵便報知錦絵新聞」の425号には「暈絶」という語に「メヲマワス」という読みが付いている。また同576号では「巡查」に「おまはり」の振り仮名が付いている⁶⁾。このように漢字にある程度自由に振り仮名を付けて漢字の意味と振り仮名の読みからくる意味とを相互補完させて理解を促していたことがわかっている。

『浮雲』の第一回で使われていた996語の自立語では、漢字二字による二字熟語は389語であったが、そのうちで訓読みをしているものは138語(35.4%)であった。つまり二字熟語の1/3以上はそのまま読まないのである。もちろん漢字で書かれているので意味は視覚的にも理解が促される。

また、同範囲で語頭が漢字で書かれている語の割合を調査したところ、漢字 790語(79.4%)、ひらがな 163語(16.4%)、カタカナ 42語(4.2%)という結果であった。それを表記ではなく、「音訓などの読み」を基本とした語種別でみると、音読み(漢語) 140語(14.0%)、訓読み(和語) 815語(82.0%)、混種語 38語(3.8%)、外来語 2語(0.2%)という結果となった。

このことから漢字による表記でありながらも訓読みをする、いわゆる和語としての読みを持つ語が多く用いられていることがわかる。「～然と」という語形でありながらも訓読みして和語となっている今回調査した語も例外ではない。

そこで二葉亭四迷が書いた『あひびき』の用例を見てみることにした。詳細は省略するが『あひびき』は明治21年に発表されたものと明治29年に改訳発表されたものがあり、どちらも言文一致文体で書かれてはいるが、後者の方がより口語的であることがわかっている。

この2つの『あひびき』に使用された「～然と」という語であるが、明治21年の『あひびき』には4例(端然と^{たんぜん}② 愁然と^{しゅうぜん}① 傲然と^{ごうぜん}①)があり、いずれも音読みした表記で用いられているのに対し、明治29年の『あひびき』には10例(燐然と① 爽然と② 悄然と① 慄然と② 自然と① 傲然と① 凝然と① 茫然と①)の用例があり、

まとめ

漢字表記の副詞を見ていくことで、幼いころから漢籍の素養が十分にあったと思われる二葉亭四迷が和語の副詞にあえてその意味に近い漢語を当てていることはいくつかの例を通して確認できた。その意図としては、そこには口語としての平易な和語を基調としつつも漢語の視覚的理解を「読み物」としての小説に求めたからだと考えられる。「読み物」であるからこそ視覚的理解が活用できたのである。

漢語を和語に読むことは文調全体にも関わる問題である。新しい文体を求めて試行錯誤した彼は、漢字に訓読みの読みを振ることで、口語に近づけるように工夫したのである。その最たるものが漢語「～然と」という語形に現れているように思う。

今回は『浮雲』を中心とした調査であったが、こうした傾向は二葉亭四迷の『浮雲』や『あひびき』以外の作品にも見られることなのか、またその使用比率は同時代の作家と比べてどうなのかという調査を行わないと正確なことは断言できない。それゆえ、まだこの研究は始まったばかりである。

ただ二葉亭四迷は漢字表記の副詞を意図的に使用していることは『浮雲』の用例からも明らかとなった。引き続きの調査結果との比較を待ちたい。

(注)

- (1) 『二葉亭四迷全集第一巻』筑摩書房 1984 pp.7-176
底本をこれにしたのは、第一篇と第二編は復刻版を入手できたが、第三篇初出の『都の花』が入手できなくて確認できなかったためである。
- (2) 中里理子「明治前期の和語系・漢語系オノマトペについて —『浮雲』を中心に—」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号 2000 pp.805-818
- (3) 半澤幹一「二葉亭四迷の漢字 —『浮雲』における字法—」『漢字講座 9 近代文学と漢字』明治書院 1988 pp.114-142
- (4) 『浮雲』の索引には半澤幹一らが平成21～23年度科学研究費補助金基盤研究Cで「二葉亭四迷「浮雲」の電子データ化およびそれに基づく各種索引作成と研究」作成したものがあるが、底本とした版が違うため、今回改めて作成したものである。
- (5) 『分類語彙表』日本国立国語研究所 2004 p.265 p.338
- (6) 山口豊『郵便報知錦絵新聞自立語索引』兵庫県立夢野台高等学校 2016 p.4 p.40